

ハーバード大学の仏教学

——一学生の視点から——

ロバート・F・ローズ

私がハーバード大学の東アジア言語・文化学科 (East Asian Languages and Civilization——以下EALCと略す) の博士課程に入学したのは、一昨年 (一九八七年) の九月のことであった。日本での生活が長かったこともあって、一年の半分が冬のような風土のここボストンにやってきた当初は、慣れないことも多く戸惑いに満ちた日々を送っていたが、最近では勉強に追われながらも充実した毎日を過ごしている。そこで、私の過去一年半をふりかえって、一大学院生としての視点からハーバード大学の仏教学とその周辺について、以下簡単に報告することにしよう。

一

ハーバード大学は米国最古の大学として知られているが、その創立は一六三六年にさかのぼる。この年マサチューセッツ (当時はまだイギリスの植民地であった。) の議会は、ボストンからチャールズ川を隔てたニュー・タウンという村に、大学

を設立することに決定した。当時、メイフラワー号が新大陸にたどりつき、この地方にイギリス植民地が初めてつくられてから、わずか十六年しか経過していなかった。それにもかかわらず、マサチューセッツの人口はすでに一万人を越えようとしていた。これらの移民の中にはイギリスのケンブリッジやオックスフォード大学の卒業生が百人以上含まれており、このような人々の中には自分たちの子弟にも大学教育を身につけさせたいと念願するものも少なくなかった。このような事情のもとにマサチューセッツ議会は大学設立に踏み切ったのであった。

その翌年、ボストンにほど近いチャールストンという町のジョン・ハーバード牧師 (一六〇七—一六三六) が、自分の蔵書のすべてと八〇〇ポンドという、当時としては莫大な資金を新大学に寄贈したことが、大学の建設にいっそう拍車をかけることとなった。そして、一六三九年には、ジョン・ハーバードを記念して、新大学はハーバード大学と命名され、ニュー・タウンの村はイギリスの大学町に因んでケンブリッジと改名された。創立当時のハーバード大学は、学長を兼ねた教員一人と学生四人という、極めて小規模のものであった。しかし、大学誕生から三五〇年以上たった今日では、一五、〇〇〇人の学生数を誇る世界有数の大学の一つに成長した。これらの学生は全米のみならず世界九〇ヶ国から集まっており、大変国際色豊かな雰囲気をつくりあげている。

現在、建学当初の校舎はすべて焼失し、当時を物語るものも残っていないが、一七二〇年頃から相次いで建てられた赤煉瓦



冬のハーバード・ヤード（ホリス・ホール）

の校舎は今日でも大学の中央広場であるハーバード・ヤードをとりまくように立ち並び、伝統の趣きあるたたずまいを残している。

二

さて、これまでハーバード大学は、イギリス植民地時代から政治・経済・文化に少なからぬ影響を及ぼしつつ、アメリカの学問の中心地として栄えてきた。同様に仏教研究についても常にアメリカの学界をリードしてきた。現在この大学の仏教学は、永富正俊教授とマルコム・デイヴィッド・エッケル教授 (Malcolm David Eckel) が中心となっている。

長年ハーバード大学の仏教学をひとえに支えてきた永富教授は、仏教に関して幅広い認識のもとに講義を行なっている。このことは教授が次のような授業を担当していることからもうかがえよう。

Religion 1700. An Introduction to Indian Buddhism.

(インド仏教概論)

Religion 1702. History of Buddhism in East Asia.

(東アジア仏教史)

Religion 1711. Buddhism between Aesthetics and Ethics

in Comparative Perspective.

(仏教・美学・倫理—比較研究の視点から)

Religion 2702. Buddhism and Japanese Culture.

(仏教と日本文化)

これらの授業は必ずしも毎年開講されているわけではないが、インドから日本に至るまで仏教全般にわたった講義内容である。またそれ以外にサンスクリット・パーリ・チベット仏典の講読も教授の担当である。永富教授のように仏教全体に精通している学者はアメリカでも稀な存在である。従って、学生が仏教の如何なる分野に関心を持とうとも、永富教授のもとでは適切な指導を受けることができる。教授のもとには、その豊かな知識と温和な人柄に惹かれて、全米のみならず世界中から仏教学を志す若い学生たちが集まっている。今日まで教授のもとで PhD を取得した学生は三〇人近くにもなるというのだが、その中にはすでにアメリカの仏教学の第一線で活躍している学者も多い。

一方、インドとチベット仏教を専門とするエッケル教授は、*Jñānagarbha's Commentary on the Distinction between the Two Truths* (1987) の著者として有名であるが、最近では、その他にも数多くのすぐれた論文を発表している。“Gratitude to an Empty Savior: A Study of the Concept of Gratitude in Mahāyāna Buddhist Philosophy,” *History of Religions*, 25-1 (August 1985): 57-75; Bhāvaviveka's Vision of Reality: Structure and Metaphor in a Buddhist Philosophical System,” *Journal of the American Academy of Religion*, 55-1 (Spring 1987): 39-54; “Indian Commentaries on the Heart Sūtra: The Politics of Interpretation,” *The Journal of the International Association of Buddhist*

Studies, 10-2 (1987): 69-79 などがそれである。

エッケル教授はハーバードで PhD を取得後、ハーバード神学校 (Harvard Divinity School) の教授に就任し、現在に至っている。エッケル教授のように仏教を専門とする学者が、神学校の専任教授として講義を行なうことは、はなはだ奇妙に感じることが多い。これはハーバード神学校の極めて進歩的な方針によるものである。この MTS (神学修士) 課程の学生は、世界諸宗教 (Religions of the World) と名づけられる研究分野を専攻することができる。つまり、神学生でありながら、仏教・ヒンズー教・イスラム教などのキリスト教以外の世界の主な宗教について学ぶことができるようになっている。こういったユニークな授業編成は、従来互いに接触する機会が少なく各々独立して成長してきた諸宗教が、世界の緊密化とともに様々な形で影響を及ぼし合うようになった今日では、キリスト教の信者であっても他の宗教を知る必要があり、また神学という営みそのものも、他の宗教との出会いというコンテクストの中でなされなければならない、という信念の顯れである。

このような状況の中、エッケル教授は、次のような授業を開講している。

Religion 1701. History of Buddhism in India and Tibet.

(インド・チベット仏教史)

Religion 1751. Indian Philosophers through their Stories.

(インドの哲学者—その伝記を通じた研究)

Religion 2705. The Origins of the Mahāyāna—Seminar.

(大乘仏教の起源—セミナー)

Religion 2765, The Christian-Buddhist Dialogue.

(キリスト教と仏教の対話)

このようにエッケル教授は主にインド・チベット仏教について講義しているが、特に注目されるのは、キリスト教と仏教の対話に関するセミナーである。これは神学校における仏教研究の特色を顕しているといえよう。

III

ハーバード大学の大きな魅力の一つは、世界中のトップレベルの研究者による講演が頻繁に行なわれていることである。大学新聞の催し物欄には、毎週約六〇から七〇にも及ぶ特別講演の案内が掲載されている。これらの中には仏教に関する講演会も少なくない。仏教に関するもの多くは、Buddhist Studies Forum が主催している。このフォーラムは大学内外から仏教学者を招き、毎月研究発表の場を設けている。昨年の秋には、訪米中の高崎直道教授やロロンビア大学のロバート・サーマン教授などを迎えて講演会及び活発な意見交換が行なわれた。

このフォーラムの外にエドウィン・ライシャワー日本学研究所、サンスクリット・インド学学科、神学校の世界宗教研究センターなども、仏教関係の研究発表会を時折開催している。

また、近年、仏教伝道協会の援助によって沼田客員教授 (Numata Visiting Professor) がおかれるようになった。これは一学期間、アメリカの学生を対象に仏教について講義を行なう

ことを目的としているが、ハーバード大学以外にもパークレー大学、シカゴ大学、カナダのカルガリー大学などにも設置されている。ハーバードでは初代客員教授として、梶山雄一、ロバート・サーマン両教授が迎えられ、共同でインド仏教の講義を行ない好評を得たと聞いている。その後一九八七年には、京都女子大学の徳永道雄教授が招聘され、神学校のエッケル教授と共に仏教とキリスト教との対話についての授業を行った。そして今秋には、高崎直道教授が客員教授となり、神学校において、大乘仏教についての講義を行なっている。

このような環境の中、学生は第一線で活躍している学者の講演を直に耳にすることができるといえる。世界中のすぐれた研究者から直接仏教学研究に関する最新情報を得られることは、仏教学を志す学生にとって大変幸せなことである。

ところで、ハーバードの宗教学または仏教学に関連の深い研究施設の一つとして世界宗教研究センター (Center for the Study of World Religion) がある。このセンターは一九五八年に創立され、当初より世界の宗教の生きた交流の場として機能してきた。センターには、設備のゆきとどいたアパートが設けられていて、毎年、各国から世界諸宗教について研究するためにハーバードに招かれた学者数人と、ハーバード神学校及び宗教学プログラムに席を置く学生たちが生活している。センター創立者の意図は、このように、様々な宗教を信奉する人々が、同じ建物の中で共に生活することによって、お互いの宗教について活発に討論し、理解を深めることが、容易にできるような

環境をつくることにあったが、この点大いに成功しているといえよう。

四

次に、ハーバード大学の授業について二つばかり具体例を挙げ、簡単に紹介しよう。一九八九年の春期、私は永富教授の Religion 1702: History of Buddhism in East Asia. という中・日両国の仏教史概論の授業を受けた。この授業の目的はインドで発祥した仏教がいかに中国や日本の文化と融合しつつ、その文化を変革させていったかを探る、というものである。ハーバード大学とハーバード神学校の共通の授業であることもあって、この講義には神学校の学生も多数受講していた。永富教授はそれらの学生をも意識して、しばしば仏教とキリスト教とを比較しながら講義をすすめる、大変興味深い授業を展開していた。講義は週三回、一時間づつ行なわれたが、それとは別に講義で取り上げられた課題について討論する discussion session と呼ばれる座談会形式の授業が設けられている。各セクションは準教員の大学院生をディスカッションリーダーとして十五人前後の学生で編成されている（大学院生の多くは、授業のアシスタントをして生計をたてている）。セクションは、この大学の教育の中で重要な役割を果たしている。それというのも、セクションの中で積極的に論議することによって、講義中、漠然としていた事柄も徐々に明らかになっていくからである。このように講義とディスカッション・セクションを並行していく授

業形式は、講義内容を把握する上で大変効果的で、日本の大学でも大いに学ぶところがあるのではないかと思われる。

この大学では、学部生、大学院生とも、一学期四科目を受講しなければならない。一学期に四科目とは、いささか少ないように思われる向きもあるが（一科目につき授業は週三回ある）、実は、これはかなりハードなスケジュールである。日本の講義形式とは異なり、ここでは講義と並行して毎週、七〇～一〇〇ページの資料や研究書を読むといったことが珍しくない。実際、指定された資料をその都度熟読していなければ、三時間にも及ぶ学期末試験に対応することはできない。

先の、中・日仏教史の授業でも、毎週一〇〇ページ前後の資料を読むことが義務づけられていた。この授業に出席する学生は、七冊もの中国・日本仏教の概説書や資料集を購入し、それらを学期中に読破することが要求された。さらにそれらの概説書では十分に紹介されていないテーマについては、専門書や学術論文を調べるよう指示されていたため、深夜まで図書館に籠ることもしばしばであった。

思うに、日本の大学の授業では研究書を大量に読むことよりも、師と仰ぐ教授のもとで教えを直接受けることの方が、はるかに大切であると考えられている。一方、アメリカでは逆に、授業の中心は研究書を読むことにあり、教授の講義は学生の読書に方向を与えるという補足的な意味合いが強い。

さて、もう一つ、一九八八年の秋に開講された宗教学の演習は、私にとって実り多い授業であった。この演習は、中国思想

史を専門とするドゥ・ウェイ・ミング教授 (Tu Wei-ming) とインドの Bhakti 運動の研究者であるハーバード神学校のジョン・カルメン教授 (John Carman) の二人が担当している宗教学専攻のドクター課程一回生を対象にした授業であった。Major Thinkers of the Study of Religion と題されたこの演習は、

その題名からも知られるように、宗教学研究の発展上、重要な役割を果たした学者の思想と方法を概観し、今日までの宗教学研究の歴史について、基礎知識を身につけさせることに主眼をおいている。このセミナーでは宗教学の名著と呼ばれる書物、毎週一冊ずつ、精読していくという形で進められた。ここで取り上げられたテキストは、心理学・社会学・人類学・比較宗教学・倫理学などの各方面から宗教について論じた書物である。

具体的には、ウィリアム・ジェームズの *Varieties of Religious Experiences* にはじまり、最近、英訳されてアメリカの宗教学界に大きな衝撃を与えた西谷啓治博士の *Religion and Nothingness* 『宗教とは何か』に至るまで、^註精読していくことになった。そして、授業の四日前には、その週に取りあげる本について担当の学生が一〇ページのペーパーを作成し、コピーして演習の学生に配付する。さらに、授業の二日前までに、一人乃至二人の学生が配付されたペーパーに対し三、四ページの反論を用意し、それもまた配付される。演習に出席する学生は、あらかじめテキストと配付された資料を読み、授業当日には、これらの資料にもとづいて討論することになる。このようなことが、毎週繰り返された。

以上の二例からうかがえるように、学生は大学での多大な要求に応じて、読み、書き、積極的に討論し、徹底した学問の日々を過ごすのである。

五

ところで、ハーバードでは、一体どのような形で仏教を学ぶことになるのか。まずはじめに注意すべきことは、アメリカにおいて独立した仏教学科をもつ大学は、極めて特殊な例を除いては、存在しない。そこで、アメリカの大学で仏教を学ぶには、まず、インド学・東洋学・宗教学など、いずれかの学科に入學し、その学科の中で仏教を研究することになる。ハーバードの場合、サンスクリット・インド学学科 (Department of Sanskrit and Indian Studies) / EALC¹⁾、或いは宗教学コース (Committee on the Study of Religion) のいずれかに所属するのであるが、言うまでもなく、学科によって研究方法や内容は自ずから違ってくる。私のようにEALCの博士課程所属の学生は、東アジア (中国・日本・韓国・ベトナム・チベット・モンゴル等を含む) の言語・歴史・文学・宗教などが、この学科の研究の中心となっているため、仏教をとりあげるとき、それを東アジアの歴史・文化の大きな流れの中に位置付けて研究を進めていくことが基本となっている。

また、EALCの博士課程の学生は、指導教授とよく相談した上、自分に適した授業選択をし、勉強を進めていくが、すべての学生が満たさなければならない必須条件がある。学生要覧

によると、それは、(一) 少なくとも二つの東アジア言語の上級レベルの単位を取得すること、(二) 演習を二科目受けること、(三) フランス語・ドイツ語・ロシア語のいずれかを習得すること(研究書を読む能力を養う)、(四) General Examination と呼ばれる総合試験に合格すること、の四つである。

特にこの学科では、中国語と日本語が重視されているため、学生は必ずこの二言語をマスターしなければならない。殊に、仏教学専攻の学生は、サンスクリットやチベット語の授業に出席するよう指導され、文字通り、語学漬けの毎日である。こうしてEALCの授業は、語学関係がその大半を占めてしまうため、仏教などのように、日頃いろいろ興味関心のある講義は、語学の授業の合間をぬって受けることになる。

ところで、EALCの博士課程における最大の難関は、先の(四)に挙げた General Examination である。この総合試験は、アメリカのどの大学においても PhD 課程の要となっているが、これは、学生が、各々、自分の学問領域すべてに精通しているかどうかを審査する、というものである。この試験の形式は実に多種多様で、各大学・学科によって異なる。EALCの場合、東洋学の主な研究分野の中から、三分野を選び、それについて口答試験が実施される。例えば、その試験の範囲として、(一) 中国仏教、(二) 日本史、(三) 日本文学、の三分野を選択したとする。当然、このような広い分野を細部にわたり完全にマスターするのは無理である。そこで、各分野の教授と、それぞれ相談の上、もう少しし的をしぼって、それを中心に独自で試験勉強を

進めていくことになる。そして、これらの試験に通過してはじめて、PhD の最後の段階である学位論文の制作にとりかかる資格が与えられるのである。

以上のことからわかるように、極めて専門的な勉強が中心となる日本の大学院教養とは異なり、この大学では、各自の研究領域全体にわたって学識を養わなければならない。即ちEALCで仏教を専攻する場合、仏教以外の東洋学全般について、幅広い知識を得ることが要求される。ここでは個人の関心が仏教にあるからといって、それだけを専門にして研究することは認められない。このことは、サンスクリット・インド学学科や宗教学コースであっても同様である。

六

ハーバード大学における仏教学に関して、私の拙い経験を中心に雑感を綴ってきたが、いささかでもこの大学の仏教学の風潮を感じていただけたかと思う。

最後に、これまでに最も印象深く感じたことを二、三記しておこう。

一つに、ハーバード大学は、東部が誇る厳格な学問の伝統を今も維持し、アカデミックな雰囲気支配されている。思想界の最先端の動きが活発に取り上げられていて、いかなる分野の学生でも、それらを意識せずにはいられない。二つめに、教授陣は、学生の教育ということに実に熱心である。各々それぞれの学問分野の第一人者であるということにもかかわらず、忙し

い研究の時間を割いて、研究室に訪ずれる学生を暖かく迎え、勉強に関する質問に親切に応じるのが常である。また、学生の提出したペーパーには必ず詳しいコメントを施すなど、学生がより適切な研究を行なえるよう方向づける指導をする。三点めとして、学生は、多大な課題に対して、自分の力で納得のいく成果をあげようとする確固たる意志をもっている。このように学問に関して厳しい態度で臨み、自己の限界に挑戦していく姿勢には、孤独なもののさえ感じるが、敬服せずにはいられない。こうした学風の中で育かれた学生たちの中には、アメリカの仏教学の将来を担うものも少なくないと確信する。

註

このセミナーで取り上げられた書物は、次のようなものである。
George Lindbeck, *The Nature of Doctrine*; William James, *Varieties of Religious Experience*; Emile Durkheim, *The Elementary Forms of the Religious Life*; Max Weber, *The Protestant Ethic and the Rise of Capitalism*; Mary Douglas, *Natural Symbols*; Victor Turner, *The Ritual Process*; Erik Erikson, *Young Man Luther*; Rudolf Otto, *The Idea of the Holy*; Mircea Eliade, *Cosmos and History*; W. C. Smith, *The Meaning and End of Religion*; Keiji Nishitani, *Religion and Nothingness*; Alasdair MacIntyre, *After Virtue*